

# プレゼンテーションソフトウェアを用いた「私らしさ論」紹介の授業実践

## A Practical Study of Self-Introduction (What about Me?) Made Use of the Presentation Software

安 直哉

YASU Naoya

### 1 実践の理論的背景

#### 1-1 ウィリアム・ジェームズの「主我」と「客我」

心理学の古典的教科書と言われるウィリアム・ジェームズ(William James)著『心理学要論』(*Psychology, Briefer Course*)では、「自我」を「主我」と「客我」に区分する。今田寛訳で引用する。

私が何を考えているときでも、私はそれと同時にいつも私自身、私の人格的存在を多少とも自覚している。また同時にそれを自覚しているのも私である。したがって私の全自我(セルフ)はいわば二重であって、半ば知者であり半ば被知者であり、半ば客体であり半ば主体であって、その中に識別できる二つの側面がある。その二側面を簡単に言い表すために一つを客我(Me)、他を主我(I)と呼ぶことにする。(1)

「主我」は「純粹自我」(2)、いわば「意識する私」である。一方「客我」は「意識される私」となる。「主我」が「客我」をどう意識するかは一律ではない。

主我とは所与の瞬間に意識するものであり、これに対して客我は意識されるものの一つに過ぎない。(3)

主我が客我のどの側面をどのように意識するかで、自己評価は一個人内においても千差万別の幅を持つ。主我が社会的客我・精神的客我を肯定的・積極的に評価したものを、本稿では親しみ易い言葉で「私らしさ」と呼ぶことにする。

#### 1-2 河合隼雄著「わたし」とはだれか」考

心理学者の河合隼雄は次のように述べている。

「わたし」という存在を、言うならば客観的に見て、「そうだ、ここに『わたし』という一人の人間がいる」という体験を、あんがい十歳頃にしている子が多いのである。(4)

この体験は、「主我」が「客我」を明確に分離して意識した瞬間と解釈できる。それ以降、これまで以上に「主我」と「客我」は相互に影響を与えながら、自我の成長を図っていく。

河合は続ける。

私が京都大学教育学部の臨床心理学の教授をしていたときに、こんなことを講義で話していると、当時の大学院生の高石恭子さん(中略)が、広く高校生や大学生などに調査をして、「私」体験の大切な節目が、十歳あたりにあることを明らかにした。(中略)この調査によって、十歳の重要性が明確になって非常に嬉しく思った。(5)

十歳頃に遭遇する「私」体験を重要視し、それについて国語教材として書き下ろしたのが河合隼雄著「わたし」とはだれか」である。1992(平成4)年度から1995(平成7)年度にかけて光村図書出版の小学校6年生の国語教科書に掲載された。本教材を要約すると以下の通りとなる。

河合少年は、10歳か11歳の頃、「参観日」に親の前で張り切って発言をしたら見当外れの解答だったため、教室中が笑い声に埋まった。その瞬間、母からも先生からも友達からも全く切りはなされて、たった一人で、どこかに放り出されたように感じた。私は、ただ一人だけでこの世にいるとしかいえないような気持ちになった。こうして、私は初めて「わたし」を見つけたのである。私が見付け出した「わたし」は、いつ

たいこれからどうなっていくのだろう。どうしてか分からない、ともかく、この世に生きることになった「わたし」というものを、かけがえのないものとして、これまで何も気付かずいたときよりも、もっと大切に见守ってやりたいと思うようになった。(6)

この教材の一反響について、河合隼雄は興味深い逸話を残している。

あるところに講演に行ったとき、一人の母親が近よって来て「先生にお礼を申しあげたい」と言われた。教科書にあった『「わたし」とはだれか』の文によって、「私も私の息子も救われました」とのこと。その後に微笑しながら「あの文のおかげで『不良』になるのを救われた子は他にも居ますよ」と言われた。この言葉によって、私こそ救われたように感じたのである。(7)

この母親の言いたかったことを咀嚼してみよう。客我を意識した主我であるが、教材「「わたし」とはだれか」から示唆を受けて、主我が客我を適切に社会化するように努めた。また、客我也社会化を通して主我の成熟に貢献した。社会的逸脱を回避すべく主我が客我を制御して、安定した主我と客我を獲得できたのである。

### 1-3 ミードの自我論

上記と同様の説明はミード (Mead, G.H.) の自我論でも可能であろう。ミードは言う。

自我意識をもつためには、自分がまさにしようとしていることを制御するような他人の態度を自分自身の生物体のなかにもたねばならない。そういう態度を採用するときに、その人の自我の即時的な経験のなかにおこるものが、わたしのいう「me」である。その共同体のなかでこそ自分自身を維持できる自我は、まさに他者たちを認識する度合に応じて共同体のなかで認識される。自我のこういう側面こそ、「me」の側面としてわたしが述べてきたものである。(8)

共同体のなかで、各個人にはある役割が期待される。期待される役割に気づき、その役割をはたすような個人になるべく、「me」を開拓して制御していかなければならない。「me」を開拓し制御する主体は「I」である。と同時に共同体の間は「共同体への反作用をとおして共同体を変化させる人間でもある。」(9)

いずれにせよ、共同体のなかで「me」にどのような役割が与えられてきたかを認識するのは「I」である。現在の「I」による「me」の解釈の結果が、本稿で言う「私らしさ」につながる。

## 2 「私らしさ論」紹介の授業実践

20歳を迎える大学2年生の時期に、「Me」の来歴と現在を省察させることは、自分の社会的役割と今後の可能性を再考する良い機会であり、自我の形成にも積極的な刺激を与えるものとする。

更には、将来、教師となり、児童・生徒の主我と客我の成長を支援する立場に置かれる教育学部の学生に、自らの客我を省察する機会を与えることは、有益な体験になると思われる。

以上の理由により、単なる自己紹介という一般的な言語表現活動ではなく、一工夫加えて、「私らしさ論」という題目のもとで、受講生全員にプレゼンテーションを課すこととした。

事前にジェームズの「I (主我)」と「Me (客我)」の理論の紹介をした。また、「私らしさ」の形成に影響を与えた「ライフイベント」の紹介を中心に、自分史を語る構成で発表をまとめるように指導した。そのうえで具体例として、授業者(安)自身の「私らしさ論」を紹介発表した。小学生時代、高校生時代、大学生時代、大学院生時代、助教授(准教授)時代、教授時代と区分して、そのそれぞれの時代に遭遇したライフイベントを紹介のうえ解釈し、それらが現在の「私らしさ」の形成に綿密に関係している旨を、分かりやすく提示した。

プレゼンテーションには、Microsoft社のプレゼンテーションソフトウェア「Power Point」を使った。スライドを作成したうえで、スライドの上映と肉声(マイクを使用)でプレゼンテーションを行う。一人あたりの制限時間は4分間とした。

大学2年生配当の教職科目「国語科教育法Ⅱ」において2017(平成29)年10月~11月に実施した。

### 3 考察

全員の発表が終わった後に、小レポートを書かせた。題目は「1 自分の「私らしさ論」を制作して感じたこと、分かったことを論じなさい。」と「2 友人の「私らしさ論」を視聴して感じたこと、分かったことを論じなさい。」の2題である。

#### 3-1 自分の「私らしさ論」を制作したうえでの感想文とその考察

典型的な感想文をいくつか紹介する。(10)

##### 【学生 A の場合】

「私らしさ論」を制作したことにより、自分の人生における重要なポイントや、何が自分を作っているのか、昔から今にかけて続いている誰にも負けてないようなものなど、改めて知ることができ、教師になるという夢をもう一度見つめ直すことができたのはもちろんのこと、今後生きていく上での課題や目標を再認識することができたので、とても良い機会だったと思う。(学生 A)

将来の職業選択において教員志望の念を更に強く意識できたという。岐阜大学教育学部・教育学研究科憲章には、「すべての人に幅広い教養と高い水準の専門的力量をもって教育を行う専門家ならびに教育関係者を育成する。」と謳われている。同憲章に沿うかたちで学生 A の意識を高められたという点において、この実践は本学部学生にとって有意義であったと評価できよう。

##### 【学生 B の場合】

「私らしさ」とは何なのか?—あまり良く考えたことのなかった私にとって、とても良い、自分を知る機会になったと思います。私とはどんな人間で、何がきっかけで今の私があるのかを知ることができました。昔の自分と今の自分をふりかえって分かったことはたくさんありますが、その中で強く感じたのは、感じ方や考え方、価値観や人とのかかわりかたなどが、まるで別人のように変わってきたことです。しかし、少しではありますが、その中に一貫したアイデンティティのようなものを見つけました。それは私の根底にあるもの、私を形成してきたものであり、それこそが「私らしさ」なのだと思いました。(学生 B)

児童期から青年期にかけては、社会認識や行動において大きな振れ幅を示す。そのなかにあっても自己同一性を認識し得たことは、学生 B にとって大きな収穫であったはずだ。その意味でも人生を省察した本実践は「とても良い、自分を知る機会になった」と評価できる。

##### 【学生 C の場合】

制作するにあたり、今まで起こった出来事、したこと、考えたことなど、多くのことを振り返ることをした。すると、起こった出来事がきっかけとなり、今の自分の考えを作っている、「私らしさ」につながっていると気づいた。出来事、行ったことについて、一見ばらばらでも、共通点が見つかり、今までの集合体が今につながっていると感じた。そのため、その人らしさを見つけることは、その人の多くのライフイベントを洗い出し、そこから共通点を見つけることで、可能となると考えた。(学生 C)

極めて粗削りではあるが、学生 C は内省の方法論を身に付けることができた。これは教師になってから、児童に作文を綴らせる際に役に立つであろう。また、学生 C は次のように書いている。

また、写真整理をする。「過去の私はどんな子だったか」「今はどうか」を人に聞いたり、今まで言われた言葉の整理をするなどをして、客観的な視点でも自分を伝えようとした。すると「自分から見た自分」と「他者から見た自分」に多少の差があることに気付いた。(学生 C)

学生 C は「自分から見た自分」と「他者から見た自分」が必ずしも一致せず、多少のずれがあるということを認識した。相対的な自己評価ができる能力を開発できたのである。多角的な自己評価を累積していくことは、人格の成熟に寄与する。学生 C にとって貴重な体験となったはずである。

### 【学生Dの場合】

今までは、自分の「人と話すのが苦手」や「自信がない」などネガティブな面ばかりを見て、なんて自分は駄目なのだろうと落ち込み、さらに自信を失くすというループにはまっていた。しかし、「私らしさ論」を制作して自分の人生にきちんと向き合ってみたら、いじめなどの逆境に負けずに頑張っ生きてきたことや、試練を乗り越えてつけた力などに気づくことができた。また、今まで悩んでいた自分の短所が形成された原因を分析することができた。自分を振り返り、「私らしさ論」を制作したことで、自分を客観的に見つめ、正当な評価ができるようになった。(学生D)

学生Dは本実践を通して「自分の人生にきちんと向き合ってみ」という、極めて大切な内省行為を経験した。自己を同定して、自己の成長の再起点とする方法論を、学生Dは身に付けた。これは将来、教師になって、児童・生徒の成長をサポートするにあたって有効な発想として寄与するであろう。

### 【学生Eの場合】

自分の「私らしさ論」を制作して、分かったことは、4分間という短い間に人生の出来事を話すとなると、自然と自分に起こった重大な出来事が見えてきて、自分がどういう性格なのかが改めて理解できることである。自分がなぜ現在の人生を歩んでいるのか、何のために教育学部に入ったのかということを見つめ直すことができ、人生の目的を再認識することができると感じた。また、目的を再認識するとともに、本当にこのままの人生でいいのか、という疑問を持ち、将来に対する可能性の幅をひろげられたように感じた。(学生E)

いささか抽象的ではあるが、「人生の目的」という難問に必然的に到達した様子が読み取れる。「本当にこのままの人生でいいのか」という疑問は、根源的であるがゆえに容易に解答が得られるものではないが、自分の生き方を問う真摯な姿勢を開発する契機になったと言えよう。

### 【学生Fの場合】

幼少期からたどっていくと、その時期の環境や経験が、現在の自分の性格につながっていることが分かり、感動した。現在、自分が何気なく向き合っている「私らしさ」の原点を知ることで、「私らしさ」に、より一層愛着が湧いた。自分を客観的に見る経験はなかなか無いので見つめ直すきっかけとなった。周りから私がどう見られているのかということも大切だが、自分が自分をどう見てあげられるかが自身の成長に大きく関わると考えた。(学生F)

「私らしさ」に、より一層愛着が湧いた。」との感想は、自己の成熟にあたって大切な感覚の獲得を意味する。自己愛着感は自己肯定感につながる。その意味で本実践は、学生Fにとって有意義な活動だったと言えよう。

### 【学生Gの場合】

自分について、どのようにまとめたら相手に伝わりやすいかということに頭を使ったと思う。自分の経験を上手に面白く伝える力は、国語の教師になるにあたってとても大切になると思うので、残りの大学生活でプレゼン力も意識して、授業をうけていこうと思う。パワーポイントをつくる時は楽しくやれて良かった。(学生G)

学生Gは、言語表現力が国語教師にとって重要な技能であることを実感した。また、「パワーポイントをつくる時は楽しくやれて良かった。」と、課題予習作業が楽しかったことを言明してくれたのは、授業者にとっても望外の喜びである。

### 【学生Hの場合】

私は、いつも一人であることが多いのですが、パワポに使える写真を探していると、周りに人がいる写真が多くて、驚きました。一人でもなんとかなっていると思っていたのですが、意外にも周りに支えられて生きているのだなということがよくわかりました。これからは、支えてくれている人たちのことをもっと思いやって過ごしていけるといいなと思いました。(学生H)

学生Hにとって、この課題予習作業は、自らの対人関係の認識を刷新する契機となった。将来教員となっ

た際には、チーム学校として教育活動にあたらなければならない。孤独感から脱皮できたことは、社会人生活への準備における貴重な糧となろう。

#### 【学生Iの場合】

私らしさ論を製作するにあたって改めて自分を見つめなおし、分析することとなった。そこで気付いたことは、自分は意外にも自分のことを知らないということだ。自分とはこういう人間だと思っ  
ていても、過去のエピソードや自分の現在の行動を分析すると、自分が思っていた自分ではなく、新しい自分が見えてくると感じた。(学生I)

本課題を通して、自己認識の修正を図ることとなった一例である。柔軟に自己を見つめられる能力が活性化されたと言えよう。

#### 【学生Jの場合】

私が「私らしさ論」を制作するにあたって、自分のターニングポイントとなった出来事を思い出すと、教師が関わってくるものばかりで、教師になりたいと思っていたことはまぎれもない事実だと確信した。(学生J)

自分を担任(担当)した教師に感化されて、自らも教師を志す者は少なくない。学生Jもその一人であった。

#### 【学生Kの場合】

幼少期から現在とまとめるうえで、今までに起きた出来事で印象に残っていることで、他人に伝えたい、と思うのはプラスの出来事だと感じた。本当は悩んだり苦しんだりしたことも「私らしさ」を構成する大切な要素なのに、人前で話すことははばかれてしまった。(学生K)

当然ながらネガティブ体験も自己の形成に影響を与える。しかし、そうしたネガティブ体験はプレゼンテーションから省かれてしまう。こうした傾向は自己表現の授業の限界を示唆している。しかし、発表内容からは外されたとしても、当該のネガティブ体験が(良かれ悪しかれ)現在の「私らしさ」に関与していると自覚するのは、決して無意味なことではないであろう。

### 3-2 友人の「私らしさ論」を視聴したうえでの感想文とその考察

以下のコメントは、大きく括ると、他の学生のプレゼンテーションに対する評価の文章ということになる。

#### 【学生Aの場合】

パワーポイントに関しては、私は話すことを、一文一文アニメーションをつけて全て書いたが、要点だけをまとめて話をメインにしている人がいて、わかりやすいと思った。パワーポイントに全てを書くところとごちゃごちゃするので、パワーポイントには要点を書くようにしようと思った。(学生A)

「私らしさ」を聴衆に伝えることが目的であり、パワーポイントはその道具に過ぎない。話の内容をどこまでスライドに記すかは、発表の内容や状況によって異なってくる。今回のようなパーソナルな内容の場合は、ポイントのみをスライドに記し、詳細は肉声で説得したほうが効果的であったようだ。

#### 【学生Dの場合】

どの「私らしさ論」も、内容がまとまっていて、さらに見やすいプレゼンが作られていたり、ユーモアが入っていたりして、友人たちのプレゼンテーション能力に驚かされた。(学生D)

教室内プレゼンテーションにおいても「ユーモア」は有効に機能する。「ユーモア」の発動は、発表者と聴衆との間に瞬時に一体感を醸し出す。ユーモアを交えて話すということも、教師の卵たちにとっては有意義な資質と言える。

#### 【学生Eの場合】

友人の「私らしさ論」を視聴して感じたことは、自分と違って明確な目的を持って大学に入った人もいれば、自分と同じように、なんとなく大学に入ってきた人もいるということである。特に目的を

持って大学に入ってきた人の「私らしさ論」は内容も充実していて、他人の考え方から自分の人生を見つめ直すことにつながったと感じた。改めて、なんとなくの人生を送ってきた自分に対する疑問が生まれ、これからの人生をしっかりと設計していかなければならないと感じた。(学生 E)

学生 E が言う「目的を持って大学に入ってきた人」というのは、おそらく教職志望という意志のもとで岐阜大学教育学部に入学してきた学生達を指すのであろう。学生達の意識のなかにも、「あの子は教職志望」「あの子は教員になる気がない」という色分けがなされているようである。教職志望の学生にとっては、岐阜大学教育学部学校教育教員養成課程のカリキュラムへの適応性は高い。しかし、教員になる気がない学生にとっては、本学部のカリキュラムをどう捉えているか、必ずしも明確ではない。

#### 【学生 F の場合】

現在の性格などからは想像できないような幼少期を過ごしていたり、困難を経験しているという驚きが多かった。現在の明るさや成功の裏に数々の辛い経験や失敗を重ねている人は強いという印象を受けた。人によって経験は様々だが、どの人もそれぞれの「私らしさ」に誇りを持っているように見えた。(学生 F)

岐阜大学教育学部に入学して来る学生は、小学校・中学校・高等学校生活に適切に順応し、自己肯定感も相対的に高い場合が多い(これは次に示す学生 L の文章からも了解できる)。自己肯定感の高さが、学生 F の言う「私らしさ」に誇りを持っている」様子に表れている。そもそも学校生活や学校文化に適応できず、学校が嫌い嫌い仕方がないというような者は、教育学部学校教育教員養成課程に入学しようと思わないであろう。

#### 【学生 L の場合】

私は他の人の「私らしさ論」を視聴して、小学校のうちから学級委員や班長など、リーダーを経験している人が多く、その人達のほとんどが割と初めの段階から先生を目指したり、憧れを持って、教育学部に入ってきたことわかった。(学生 L)

学校生活の中でリーダー格になれる児童・生徒は学校文化への適応性も高い。おのずと学校を運営する教師という職業への志向性も高くなるという循環が読み取れる。ただし、こうした単純な論理では説明しきれない例も少なくない。次に掲げる学生 M の感想がそのことを率直に示している。

#### 【学生 M の場合】

小学校や中学校時代にいじめを受けたと話してくれた二人が居たが、どちらの方もそれをネガティブな出来事だととらえずに、ポジティブに受け止め、自分を変える努力をしたということに尊敬の念を抱いた。特に、「自分がいじめを受けていたときに、先生は何もしてくれなかったから、教師になってやろう」という言葉は、非常に心に残った言葉だった。このように、どのような出来事も最終的には自分の考えようでポジティブなものにも、ネガティブなものにもなり得る可能性を秘めているのだということを感じた。(学生 M)

自分の担任であった教師を、まさに「反面教師」とすることで教職志望の意志を固めたという、複雑かつ屈強な思想が読み取れる。また、それを聞いた学生 M も、「どのような出来事も最終的には自分の考えようである」という、認知療法の根底をなす発想に気づいた。有意義な交流だったと評価できよう。

#### 【学生 N の場合】

今、岐阜大学で国語の免許を取るという、同じところに立っていても、それまでに歩んできた道はそれぞれ全然違って、まさに十人十色だと感じた。でも、どの人にもつらいことがあって、それを乗り越えて成長して、新たな自分らしさを獲得してきたという共通点があると分かった。(学生 N)

当然のことながら、幼児期から高等学校を卒業するまでの経験は、全員がそれぞれに異なっている。しかし、この岐阜大学教育学部国語教育講座に同学年で入学したという一点において、運命とも言える導きがあった。そのことに気づくとき、学生同士の紐帯感が生まれる。将来教師になるなかで、困難に直面することも多い。そのときに同窓生からのアドバイスは救いになる。

### 【学生 O の場合】

この講義のためのスライドひとつひとつから、「その人らしさ」が滲み出ていることを実感した。

写真多めの人、文章多めの人、アニメーションをつける人、音声をつける人、説明が上手な人、聞き手に問いかけをする人、スライドの背景を工夫する人、声のでかい人などなど、それぞれ各々の自分らしさを前面に出したスライドばかりで、とても興味深く、飽きずに視聴できた。(学生 O)

巷間では、国立大学入学者は偏差値で輪切りにされた結果だと言う。偏差値という一尺度においてはそうかもしれないが、各人の個性は想像以上に多様である。

### 【学生 P の場合】

それぞれがそれぞれの経験をして「私らしさ」を形成していることが分かった。特にその経験の中で恩師と呼べる存在を見つけている人が多くて、教師という仕事は大変なことも多いけど、親身になって子どもに向き合うことが出来たら、子どもに夢を与えられる素敵な仕事だと改めて実感した。(学生 P)

恩師と呼べる教師との出会いが、教職志望の導引となったことを示唆する文章である。「教師という仕事は大変なことも多い」のを承知のうえで、それでも教職を志す若者がいる。ここに教育学部の存在意義が明示されている。

### 【学生 Q の場合】

私は小学生時代に少し人間関係のこじれからつらい経験をしたことがあって、「私らしさ論」を発表するにあたって、隠したい過去だったのであえて発表はしなかったのですが、みんな正直につらい過去を発表していて、つらい経験はみんな通過しているのだ、とみんなの強さを感じたと共に、勇気をもらう部分がたくさんありました。また、みんなそれぞれ夢を持っていて、私もきちんと夢を具体的に持たなければならぬといけない、など、刺激をもらいました。(学生 Q)

学生 Q のように、ネガティブな体験は発表内容から除外した学生も多いと推察できる。しかし、その一方で、ネガティブ体験をありのままに発表した学生も少数ながら存在した。ナガティブ体験も包括して現在の自己を発展させていこうという発想の契機となれば、(ネガティブ体験を発表に挿入するにしても、削除するにしても)本授業の目的は十分に果たされた。

## 4 まとめ

大人になる前に、客我の来歴を見つめ直すことは、成長の節目として機能する。本授業実践で、学生達は、かけがえのない「私」という存在を意識できた。その意味において学生達にとって有意義な授業実践であったと評価できよう。なによりも受講生が「飽きずに視聴できた。」(学生 O)と評価してくれたことは、授業者としても喜ばしい。

### 【注】

- (1) James,W.(1892) *Psychology, Briefer Course*: London, Macmillan and Co. p.176(今田寛訳(1992)『心理学(上)』岩波書店、245頁)。
- (2) 注1に同じ。p.176(今田訳、245頁)。
- (3) 注1に同じ。p.195(今田訳、272頁)。
- (4) 河合隼雄「「わたし」体験」(河合隼雄他(2002)『光村ライブラリー第十七巻 「わたし」とはだれか ほか』光村図書出版、84頁)。
- (5) 注4に同じ。85-86頁。
- (6) 河合隼雄「「わたし」とはだれか」(河合隼雄他(2002)『光村ライブラリー第十七巻 「わたし」とはだれか ほか』光村図書出版、40-45頁の要約)。
- (7) 注4に同じ。88-89頁。

- (8) Mead,G.H. (1934) *Mind, Self & Society, From the Standpoint of a Social Behaviorist*: Chicago, the University of Chicago Press.p.196 (稲葉三千男・滝沢正樹・中野収訳 (1973) 『現代社会学大系第10巻 精神・自我・社会』青木書店、209頁)。
- (9) 注8に同じ。p.196 (稲葉他訳、209頁)。
- (10) 学生の文章については、文意を変えない範囲で句読点等を加筆し、表記を改変したところがある。